

駒場の学生生活

ページ内索引

大学入試：歴史と問題点

駒場の「教養崩壊」は本当か？ —学生生活実態調査の報告とお願い—

駒場をフィールドワークしよう—春休みの一押し

学校の先生と塾の先生ではどちらが上か

進振り制度の理想と現実

駒場のメンタルヘルス悪化をどうするか

駒場はレジャーランドか戦場か

シケプリは必ずしも悪ではない

東大生のいじめに対する認知 —いじめの被害加害と原因に関する調査—

私の受験生時代 今時の受験生がうらやましい

教育学は駒場生をどう見るか—強いヨコのつながり 都市コマバのいま・未来

なぜいま大学論か アメリカ型は失敗？

授業評価は役に立つか

入学とメンタルヘルス

夏休みのノウハウ

大学入試：歴史と問題点

(東京大学新聞 2006 年 1 月 17 日号より引用)

●日本の大学入試

現代教育について研究している丹野義彦助教授（総合文化研究科）に、日本の大学入試の変遷について聞いた。

79 年に共通一次試験が導入されるまで、日本には全国統一の学力試験が定着しなかった。共通一次試験が導入された当初、受験生の基礎学力をマークシート式の共通一次試験で測り、大学別の二次試験では筆記試験だけでなく、面接や小論文も用いて受験生を選抜するという原則を文部省（当時）は掲げていた。しかし、面接や小論文形式の試験は、採点基準に採点官の主観が入る可能性がある。結局、ほとんどの大学が二次試験でも筆記型の学力試験を課すことにした。

「この流れをうけて、現在多くの大学はセンター試験と大学別の二次試験を両方とも受験させるようになっているのです」と丹野助教授は語る。こうして、試験形式の標準として、筆記型試験が定着した。

●筆記型試験の長所と短所

教育分野に限らず、従来から資格試験や就職試験などにも筆記型試験が広く用いられてきた。試験というと、筆記型試験を連想するのではないだろうか。それほど筆記型試験はあらゆる場面において定着している。

筆記型試験の長所は、すべての受験者が同じ問題を解くという「形の上での平等」が保障されることだ。また採点方法も合理的で、結果が出るのも早い。

しかし、一方で短所もいくつか挙げられる。「一番の問題は、受験する時期を自分で決めることが困難で、受験者のコンディションが悪くても受験しなくてはならないことです」と丹野助教授は語る。他にも、短時間できばきと問題を処理する能力は測りやすいが、じっくりと考えてアイデアを創造する能力を測りにくいという点も短所として挙げられる。

●理想的な試験

個人の能力を正確に測れる理想的な試験について、丹野助教授の考えを聞いた。アメリカではSATと呼ばれる共通試験の成績が大学入学時に必要になるという。

「SATはセンター試験とは異なり、1年に数回ある試験を何度でも受けることができ、そのうちの最高点を利用することができます」。日本の大学入試は年に1度の機会しか与えられない。体調不良などで本来の能力を発揮できない場合でも、入試に再挑戦できるのは1年後だ。その点、受験生が最もコンディションの良い時の成績を利用できるSATは参考になるという。

新しい学力測定の方法として、就職する前に就業体験ができるインターンシップ制度を大学入試に応用できる、と丹野助教授は提案する。

「学生を一ヵ月間大学で勉強させてみて、学習に対する熱意や論文作成能力などを大学の教員がじっくりと測ってみてはどうでしょうか」。

実際にこのような試験を実施するのは難しいかもしれない。とはいえ、筆記型試験や推薦入試制度の改革だけでなく、大学入試の大枠自体も見直す必要があるのではないだろうか。

「教養崩壊」は本当か？ 学生生活実態調査の報告とお願い

丹野義彦（心理・教育学部会）

（東京大学教養学部報 2002 年 454 号より引用）

「東大生はマンガ大好き」とか、「東大生の愛読書は漫画と教科書」とか、東大生の「教養崩壊、本当かも」といった記事が十二月の新聞に出た。これは、本学の学生生活実態調査委員会の発表にもとづくものである。この委員会では、第五十回調査の結果をまとめて、昨年暮れに発表した。筆者はこの委員会の副委員長として記者会見にも出た。ここでは、調査への協力のお願ひもこめて、「学生生活実態調査」について報告してみよう。

● 八人に一人が選ばれる

この調査では、毎年、東京大学の学生の八人に一人が無作為に選ばれる。その中には、前期課程の学生も五百名以上含まれている。調査用紙の配付と回収は郵送でおこなわれる。回収率は年々落ちている。今回は五十四・四％であり、かろうじて五十％を上回るくらいであった。担当者は、何回も督促するのだが、それでもこの程度である。もし、この記事を読んだ学生で、回答が家に眠っているのを思い出したら、ぜひ返送してほしい。あとで述べるように、この調査は、大学に対する学生の要望や意見を吸い上げるチャンスでもあるので、ぜひ協力をお願いしたい。

● 軽～くなった東大生の読書

調査の報告は今回がちょうど五十回目であった。今回は学生の読書傾向について詳しく調べた。

表 1 をごらんいただきたい。これは「よく読む雑誌」についてたずねたものだが、二〇〇〇年は「東京ウォーカー」といった情報誌がトップになった。ちなみに、六位は Weekly ぴあ、七位は MEN'S NON・NO である。一九八九年とくらべると、肩の凝らないものに人気移っていることがわかる。マンガも青年誌よりも少年誌のほうに人気が集まった。

また、表 2 を見ていただきたい。これは、四月からの読書冊数を聞いたものである。二〇〇〇年調査をみると、最も多いのは「マンガ・コミック」約三六冊、次が「勉学に必要な本」約一九冊となっている。以上のような結果にもとづいて、「東大生はマンガ大好き」とか「東大生の愛読書は漫画と教科書」といった新聞記事が出たわけである。

また、表 2 からわかるように、「教養書」が一三・九冊から一二・〇冊へと減少している。これが「教養崩壊」といった記事になったわけである。

● 「教養崩壊」は本当か

しかし、表 2 で、一九八九年調査では、「小説・文芸書」についての項目がなく、小説・文芸書は「教養書」の中に含まれていたのかもしれない。二〇〇〇年調査では、「小説・文芸書」と「教養書」とに分けて聞いたので、「教養書」が減ったようにみえるだけかもしれない。

表 2 で、一九八九年と二〇〇〇年をくらべると、「勉学に必要な本」は一一・九冊から一九・三冊に増えている。バブルが華やかだった一九八九年当時よりも、不況の現在、学生はよく勉強するようになったといえるかもしれない。以前に比べ、学生

の収入は減っているにもかかわらず、書籍に使った金額は増えているというデータもある。

また、「最近最も関心を持った本」のランキングでは、長谷川寿一・真理子先生の「進化と人間行動」や野矢茂樹先生の「無限論の教室」がベスト二〇に入るなど、教養学部の教官の本も健闘している。さらに、十年前とくらべて、インターネットなど電子メディアからの情報は確実に増えているだろう。

このように考えると、駒場キャンパスは、必ずしも教養崩壊のレジャーランドと化しているわけではなさそうである。

●東大生も懐かしい

もうひとつはっきりした傾向がある。それは、不況が学生の懐具合を直撃していることである。調査によると、学生の親の平均年収が、五年前にくらべて七%も減少した。また、学生のアルバイト収入は減っている。東大生の生活にも不況が影を落としている。このためか、大学以外での学習（いわゆるダブルスクール）が、女子ではここ数年で大幅に減っている。

●大学への要望

また、「大学へ要望したいこと」という質問に対しては、「授業の改善」がトップに上がった。以下、「教室・実験室の充実」「教育スタッフの充実」「進学振り分け制度の改善」「少人数教育の実施」の順になっている。学生の切実な要求があらわれている。教養学部は、今年度から、学生の授業評価を全授業にとりいれたり、教官のオフィスアワーを設けたりした。このような形で、少しずつ学生の声が反映されるようにしたいものである。学生生活実態調査は、学生の要望や意見を吸い上げるチャンネルになる。

二〇〇二年度の調査用紙は、十一月に送付される予定である。これからの調査にもぜひ協力をお願いしたい。

学生生活実態調査の詳しい結果は、東京大学「学内広報」の一二二七号に載っている。駒場キャンパス正門の守衛所の脇に学内広報の置き場があり、そこで配られている。駒場の図書館でもみることができる。

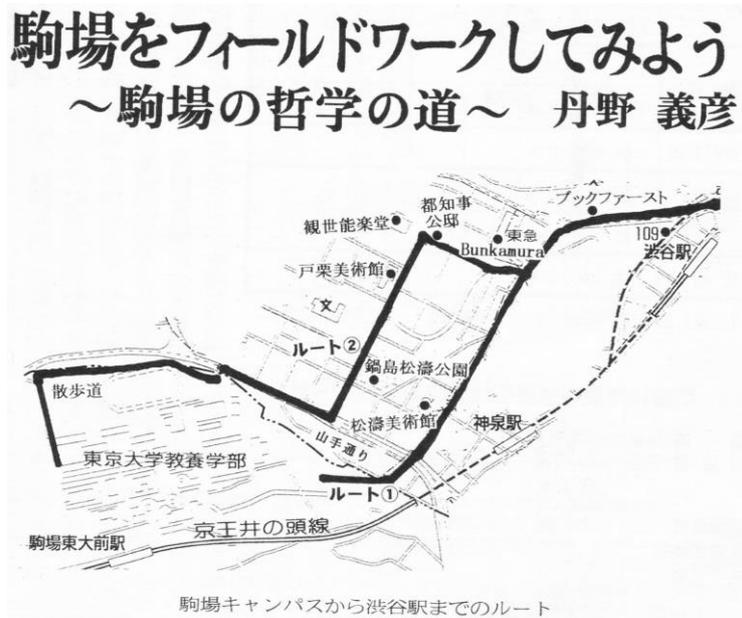
駒場をフィールドワークしよう ―春休みの一押し

丹野義彦（生命環境系／心理・教育学教室）

（東京大学教養学部報 2002 年 2 月号から引用）

外を歩くのが気持ちよい季節になった。駒場キャンパスから渋谷駅まで歩いてみよう。ルートをつたつ紹介しよう。ひとつは、数理科学研究科棟の奥の「炊事門」から出て、山手通りを横切っていくコースである（地図のルート1）。もうひとつは、キャンパスの裏門を出て、山手通りを歩き、信号を渡って、鍋島松濤公園の横を通る道である（地図のルート2）。2つとも15分ほどで渋谷駅に着く。

考え事をしながら歩くのは楽しい。歩きながら、自分自身と向き合い、こころの声を聞く。日常生活で孤独の時間を確保するのはなかなか難しい。ひとりになれる手っ取り早い方法は歩くことである。筆者は健康のためにウォーキングを始めたのだが、考えながら歩くことの楽しさに目覚めてしまった。考え事が最もはかどるのは歩いている時なのである。



考えながら歩くには、静かで安全な道がよい。2つのルートはそうした条件をそなえている。途中には、松濤美術館・戸栗美術館・観世能楽堂・Bunkamuraがある。駒場版の「哲学の道」と呼んでいいかもしれない。書店のブックファーストもある。実際、途中である本のことを思い出し、むしよりに読みたくなって、ブックファーストで探したこともある。

そうした文化的雰囲気も、都知事公邸が見える頃から薄れてしまう。「都知事はこんなすごい豪邸に住んでいるのか」とじろじろ見ていると、前にある詰め所の警官ににらまれるので注意しよう。東急デパートあたりに来ると、静寂は人込みに消されてしまい、しだいに雑事の世界に引き戻されるのである。

なお、駒場キャンパスの中にも、知る人ぞ知る散歩道がある。野球場とラグビー場の脇の道を行き、温室の前を右に折れ、弓道場と陸上競技のトラックの北側を抜け、トレーニング体育館と保育所の間に出る散歩道である。500メートル足らずなのだが、うっそうとした木々の中を通り抜けていく時、駒場にもこんなに静かな所があったのかと驚く人が多いだろう。駒場にはまだまだ知られていない場所がたくさんある（例えば、1号館の時計台に登るツアーが年1回開かれているのをご存じだろうか。興味のある方は、駒場の学生相談所に問い合わせさせていただきたい）。この春、駒場の近辺をフィールドワークしてみよう。

学校の先生と塾の先生ではどちらが上か

丹野義彦（東京大学大学院教育学研究科附属学校臨床総合教育研究センター協力研究員）

（学校臨床総合教育研究センター年報 ネットワーク 4: 108-109, 2001 より引用）.

塾や予備校の先生のお話を聞くと、いつも感心する。第2回プロジェクト研究会で、塾の先生が子供の学力について話された。こうしたお話を聞くと、筆者はいつも「学校は塾や予備校にかなわない」と思ってしまう。しかし、本当にそうなのだろうか。

筆者は、「学校の先生と塾の先生ではどちらが上か」という調査をしたことがある。東京大学の1・2年126名を対象として、26の項目をあげ、A：確実に学校の先生の方が上だった、B：どちらかといえば学校の先生の方が上だった、C：どちらかといえば塾・予備校先生の方が上だった、D：確実に塾・予備校先生の方が上だった、の4つの選択肢の中から選んでもらった。その結果は表のとおりである。数値は、AとBの合計の%であり、「学校の先生の方が上」と答えた学生の割合を示している。

これをみると、学校の先生が上であると評価されたのは、26項目中17項目であった。これに対して、塾・予備校の先生が上とされたのは、26項目中9項目であった。表の中に「総合的にみてどちらを高く評価するか」という項目があるが、全体の71%の学生は、学校の先生が上と答えている。また、「自分が先生になるなら、どちらになりたいか」という項目があるが、58%の学生は学校の先生になりたいと答えている。

表からわかるように、学校の先生が上だと思われているのは、おもに生活面での指導である。例えば、クラブ活動、社会生活・集団生活のルール、スポーツなどの指導や、非行などの問題のある生徒に対する対応などである。また、人格的な面でも学校の先生に対する評価は高い。例えば、「悩みや相談に行ったときの対応」、「人間としての暖かみ・人格の深さ」「生徒とのコミュニケーションの質」「自分の生き方によい影響を与えた」といった項目は、学校の先生が高い値を示している。

これに対し、塾・予備校の先生が上なのは、おもに学習指導面である。「学習指導の技術・巧みさ」「学習の進んだ生徒に対する学習指導」などは、塾・予備校の先生が上にきている。また、ほとんどの学生は「経済的収入」は塾・予備校の先生が上とみている。

なお、出身高校を公立と私立に分けてみると、一般に私立高出身の方が、学校の先生に対する評価は高かった。また、塾に通った年数を調べると、一般に、塾に長く行っているほど、塾への評価が高くなる傾向がみられた。

このように、学生たちは、学校の先生の優れたところや、塾・予備校の先生の優れたところを分けて見ている。つまり、学校と塾の機能を分化的に捉えている。総合的には、学校の先生が上と考えられている。学校の先生もまだまだ捨てたものではない。

余談になるが、塾や予備校の影響を大きく受けたのは大学の一般教育である。予備校に比べて、大学の教養部はあまりにつまらない。ここ数年で全国の大学から教養部が消えてしまったが、その原因の一端は予備校の魅力にあるのではなかろうか。大学教養部の教師である筆者には、そうしたひがみもあるのだが、今回の調査結果を見て、少し安心したのである。学校の先生もまだまだ捨てたものではない。

それにしても、塾や予備校は、学校と対等になりつつあり、ある面では確実に学校を抜

いている。サンプルにやや偏りはあるが、この調査はそうしたことを反映しているだろう。今や、筆者も含めて学校の先生は、安心したりひがんだりするだけでは済まない時代に来ているといえよう。

表 学校の先生と塾・予備校の先生ではどちらが上か

学 校 の 先 生 が 上	クラブ活動や趣味などの面での指導・・・	96%
	社会生活・集団生活のルールの指導・・・	94%
	スポーツや健康面の指導・・・・・・・・・・	93%
	非行などの問題のある生徒に対する対応・・	93%
	生活面の指導の熱心さ・・・・・・・・・・	92%
	生活面の指導の技術・巧みさ・・・・・・・・	88%
	悩みや相談に行ったときの対応・・・・・・・・	85%
	人間としての暖かみ・人格の深さ・・・・・・・・	79%
	市民としての社会的ステータス・・・・・・・・	77%
	生徒とのコミュニケーションの質・・・・・・・・	76%
	学習の遅れた生徒に対する学習指導・・・・	75%
	自分の生き方により影響を与えた・・・・・・・・	73%
	総合的に見て、どちらを高く評価するか・・	71%
	社会の動きに関心をもたせる学習指導・・・・	68%
	好ましい先生の多さ・・・・・・・・・・	64%
生徒の学習進度に応じた学習指導・・・・	59%	
自分が先生になるなら、どちらになりたいか	58%	
塾 予 備 校 の 先 生 が 上	学習上の質問に行ったときの対応・・・・・・・・	48%
	人間としての活力・やる気・・・・・・・・・・	44%
	学習指導の能力差(が先生間で少ないこと)・・	43%
	学習指導の熱心さ・・・・・・・・・・	41%
	生徒の扱いに差がない(えこひいきしない)・・	30%
	問題のある先生の少なさ・・・・・・・・・・	30%
	学習の進んだ生徒に対する学習指導・・・・	25%
	学習指導の技術・巧みさ・・・・・・・・・・	16%
経済的収入(生活レベルなどから推測して)	10%	

数字は「学校の先生が上」と答えた学生の割合を示す。

数値が低いことは、「塾・予備校の先生が上」と答えた学生が多いことを示す。

進振り制度の理想と現実

(東京大学新聞 1999年3月12日号から引用)

進振り制度設置の経緯

『現代教育論』の講義を長年担当し大学教育の事情に通じる丹野義彦助教授は、進振り分け制度の特色を設置当初に戻ってこう説明する。

「他大学はたとえば『理工学部建築学科』のように願書を出す際、すでに専門分野の選択が課されており、18歳で大学入試と進路決定とが同時に行われていると考えられます。他大学はすでに入試の中に振り分けを取り込んでいるのです。一方、もし学科の決定を先延ばしにするのなら、大学・学部の入試という、二本の入試を数年を置いて立て続けにおこなうか、その数年間に進振り制度のような緩やかな選抜を行うかです。前者ではその間に狭まった期間は予備校同然となってしまおうでしょうが、後者なら緩やかで適切な選抜と、学生の進路決定が動じに可能になる。少なくとも当初はそのように意図されていました」。

ところが、後に問題となってきたのは結局、「大学入試以降も続く点数競争が、学問に対する感心・態度を抑圧しかねない」という点だった。丹野助教授が96年、『現代教育論』の講義に出席した文系の学生対象に行ったアンケート調査でも、進振りを不安に思っているという回答は全体でも半数を超えている。

「点数信仰」「興味、実感より先にまず目標設定」

「本来緩やかな選抜であった進振り制度も、受験競争の延長に置いて一種の『ゲーム化』を試みる学生たちが現れてきます。例えば『影武者』といって、人気のない学科にデキる何人がわざわざ集中的に希望を出し、中間集計で底点が上がり人気が上がってきたところで一気に足を抜くとか。93年の二段階選抜の導入はそういう『ゲーム』を防ぐ目的もあった。

学科の内容云々ではなく数値の表す価値に左右されることを、教育関係の専門家の多くは『点数信仰』と呼びます。よく『金銭信仰』といますがそれと同じように、たとえばせつかく30万持つてるんだから、10万のワープロより、30万のパソコンを買ったほうがいい、という発想です。恐らくゲームとまでは行かなくとも、一部の学生には『底点が高い(=人気がある)のだから、内容もいいのだろう』と安直に考えてしまう傾向があるように思えます」

ゲームにしろ点数信仰にしろ、評定をあげることばかりに囚われれば、有意義なはずの駒場での教養教育も、希望の学科に進むという目的を得る手段に貶められてしまうだろう。

もっとも今年、文学部の中でも底点のかなり高い社会学科に進学の内定したK君は、社会学の志望理由を「単に他がつまらなそうだったからゆえの消去法」であったと言う。「総合科目でどの分野にも関心が湧かず、潰しのきく学科として思い当たるのはそこしかなかった。だがそれを『点数信仰』だと言われるのには違和感を覚える」。しかし、一方、学生生活実態調査では、学科の志望理由について、77%が「学問的関心」を挙げていることも考慮すると、志望動機にはある程度の本音と建て前の構造があると見ることもできる。

進振りのこれから

「進振り制度自体は当面は存続していくでしょう。ただ評定平均のみではなく、もっ

と学生自身の意欲や可能性も計れるような評価方法を追加して行くという点で審議が加えられつつあるのは確かです。たとえ教養課程といえども、出来る限り専門課程に習った、ゼミや論文を通じての教官と学生との対話が理想でしょう。学生のその学科に対する関心や意欲、適性の程は、丁寧に時間をかけて見てゆくのが一番なのです。目下の応急処置としては面接や小論文の導入などもあります。大学の制度もゆっくりではあるが着実に改善が加えられており、決して固定的なのではありません」

駒場のメンタルヘルス悪化をどうするか

丹野義彦（生命環境系／心理・教育学教室）

（東京大学教養学部報 1999 年 5 月 1 2 日から引用）

駒場キャンパスの表と裏

いったい駒場の学生はどうなってしまったのだろうか？

こう考えるのは筆者ばかりではないだろう。99 年 1 月には、駒場キャンパス近くで学生による傷害事件が発生し、世間を驚かせた。その少し前には、駒場キャンパスにはカンニングや万引きが横行していることを報じる新聞や週刊誌があった。さらに 95 年のオウム真理教事件では、東大の学生が深くかかわっていたことが報道された。このところ、駒場のネガティブな面ばかりが表に出る。

ここでは、筆者が『現代教育論』の時間におこなったアンケート調査をもとに、駒場キャンパスの問題点を考えてみたい（1996 年 1 月、文科生 178 名を対象）。

まず、いろいろ試行錯誤ができるとか、教師に干渉されないとか、駒場キャンパスのポジティブな面は多い。駒場の売り物はリベラルアーツや late specialization であるが、多くの学生は、その自由さやのびのび感に満足している。8 割以上の学生が「駒場キャンパスは管理が緩やかでのびのびしている」と考えている。

しかし、ネガティブな面もある。第 1 は、late specialization によって進路がなかなか決まらないことへの不安や、進学振り分けによる圧迫である。これは文Ⅲで強い。「駒場キャンパスを暗くしているのは進学振り分けであるから、学部学科ごとで入試をおこない、進学振り分けを廃止したほうがよい」という意見に対しても、全体の 35% の学生が賛成している。しかし、late specialization は東京大学のシステムの根幹に関わる問題であり、これは構造的な不安といってよいだろう。

第 2 は、教官と学生の交流の少なさである。88% の学生が「クラス担任と一度も話したことがない」と答えている。これは驚くべきことである。明らかに、現在のクラス担任制度は形骸化しているのである。その結果、84% の学生は「学生と教員の交流をもっと欲しい」と望んでいる。ふだんでも、キャンパスのあちこちで同じようなことを聞く。昔の旧制高校の評価が高かった理由として、教官と学生の交流が密であったことがあげられるが、そのような良い雰囲気は駒場キャンパスから消えてしまったのであろうか？

第三の問題点は、学生同士の助け合い意識が低いことである。学生のヨコのネットワークが、情報中心のものとなっている。「あなたの人づきあいの中心をなす人間関係は？」と問うと、サークル関係 52%、クラス関係 43%、学外の人間関係 6% という答えであった。駒場生の人間関係はサークルが中心であり、クラス関係はやや少ない。学生諸君には、クラスで互いに助け合うようなヨコのネットワークを作ることを勧めたい。

こうしたネガティブな側面が、いろいろな事件を呼び込むスキを作るのではなからうか。駒場キャンパスには 9000 名の学生がいる。そのメンタルヘルスは深刻な問題となっているといっても過言ではない。

どうしたらよいか

いったいどのようにしたら改善できるのであろうか？ 上の調査からも対策のヒン

トが見つかる。

第1は、クラス担任制度の見直しである。ひとつには、「基礎演習」の担当教官が、クラス担任を兼ねるべきだという声がある。基礎演習の担当教官は、1学期間、少数の学生と密に接し、学生の顔と名前を覚えるようになる。現在のような名目上のつきあいではなく、実質的なクラス担任となっている。これを活用すべきであろう。もちろん、理科系の学生はどうするかなど問題は残るが、学生諸君も、教官に対してもっと相談に来ていただきたい。

第2の対策は、学生相談機関のネットワークの確立である。67%の学生が「困ったときに教官や職員に相談できる場がほしい」と答えている。学生が困ったときに相談できる機関としては、保健センター・進学情報センター・学生相談所などがある。これらの機関がネットワークを作って、連携していくことが大切になる（これについては学生相談所が出している談「学生相談報告」の第4号をごらんいただきたい）。

それにはいろいろな工夫が必要である。この教養学部報にも、毎年、学生相談所や進学情報センターの自己紹介が載っている（前号を参照）。今後は、パンフレットなどの活字メディアだけでなく、インターネットなどの電子メディアを利用したPRをおこなう必要がある。また、Eメールでの相談を受けつけることなども考えてよい。

しかし、学生のニーズに比して、こうした機関の職員数は少ない。なかでも、学生相談所の充実はぜひとも必要である。筆者は学生相談所の運営委員をしているので、とくに強くそう思う。筆者の調査では、何か困ったことがあれば学生相所に行ってみたいと答えた学生は30%もいる。単純にみても、潜在的なニーズは9000名×30%=2700名に達するのである。ところが、いま、駒場の学生相談所には相談員が1名しかない。一人の相談員が9000名の学生に対処しなくてはならない。気の遠くなるような話である。この場を借りて、学生相談所の職員数の拡充を訴えておきたい。

駒場はレジャーランドか戦場か

丹野義彦(総合文化研究科)

(東京大学新聞 1997年11月18日号から引用)

1. 駒場＝最後の教養部

大学から教養学部が消えていき、駒場キャンパスは日本の国立大学最後の教養学部となるだろう。これまで、大学の教養部は一般に「休養部」「教養砂漠」「レジャーランド」などと呼ばれ、「アパシー」の蔓延する場所とされてきた。ここには、積極的に何かに取り組む時期というよりは、無難に早くやりすごすべき時期といったニュアンスがある。こうなってしまった理由のひとつは、(a) 楽をしたい学生、(b) 教育意欲のない教官、(c) 大学を信用していない企業、という三者の利害が一致したことにある。

2. 大学の売り物は「授業」ではない

例えば、予備校や塾では、「授業」こそが売り物であり、生徒はコストを払って授業という商品を買う。情報価の高い授業やおもしろい授業には消費者が集まるし、役に立たない授業は消えていく。これに対し、大学では、極端にいうと、講義の中身は誰でもよく、いかに楽をして単位がとれるかに選択の基準がある。これは、大学の売り物が授業ではなく、「卒業認定」であるからだ。例えば、自動車教習所では、ひとは講習の中身の良し悪しよりも、いかに早く安く運転免許証を入手できるかに最大の関心を払う。大学もこれと同じで、講義の良し悪しよりも、いかに楽をして（低コストで）、商品（講義の単位認定＝卒業認定）を手に入れるかに関心が集まる。1991年に、M大学法学部で卒業者千人のうち、百五十人が必修の科目だけを落として卒業できなくなった。ほとんどの学生は就職の内定が取り消しとなった。留年者は怒って、学部長宅を訪れ、「大学には愛情というものがないのか」と迫ったという。この事件からも、学生や企業が大学に求めているものは「授業」ではなく「卒業証書」であることがわかる。

さて、このことは、教官にとっても授業を手抜きする口実となる。授業の内容に労力を注いでも、給料も待遇もよくなるし、それどころか、逆に、研究時間が削られて、研究者としての評価は落ちる。だから教官は授業から手を抜き、「大学は自主性を重んじる」というタテマエのもとに、学生を放任する。

3. 大学＝「ウイスキーの樽」説

学生と教官の利害は、企業とも一致する。企業は大学の授業には何も期待しない。企業にとって大学とは、第一に、能力の選別機関であって、大学入試を厳粛におこなってくればよい。就職時に、企業が自前で学力検査をすると莫大なコストがかかるので、大学入試にタダ乗りしたいだけである。企業にとって大学とは、入試で偏差値レベルごとに輪切りした学生を四年間預かっておくだけの人材プール機関である。第二に、企業にとって大学とは人格熟成機関であり、学生が人づきあいのノウハウや体育会的な協調性や将来役立つ人脈を作るところである。つまり、大学とは、偏差値ごとに品質を管理されて、勉強させず、四年間ひたすら人格の熟成だけを待つウイスキーの樽である。学生にはへたに勉強をさせないでほしい。その証拠に、就職試験の面

接では、ゼミや卒業論文の内容を仕事に結びつけるのは禁句であり、むしろゼミや卒業論文は就職先と関係ないほうがよいという。企業は企業内教育（オン・ザ・ジョブ・トレーニング）で社員を育てるから、大学で勉強したことはじゃまになり、入社したとたん「大学で勉強したことはきれいさっぱり忘れろ」と言われたりする。へたに勉強してスペシャリストになると、プライドばかり高くて部下を使えない人間になる。その意味で、企業は、学生をスペシャリストにする専門教育や大学院教育よりは、企業内のいろいろな部署をローテーションしていくジェネラリストを養う一般教育のほうがましだと考えている。この点では、意外にも大学の教養部と企業の利害は一致するのである。

4. 大学改革—学生はクライアントか商品か

このような企業—教官—学生のもたれあい構造が、教養部のレジャーランド化を支え、その結果、大学の社会的地位の低下を招き、最近の大学民営化論のもとになっている。また、真剣に何かを学びたい学生や、何かを伝えたい教官にとっては、このもたれ合い構造は妨害物以外の何ものでもない。そこで、この危機を打開するために、全国の大学は授業の改革をすすめるようになった。ひとつの極端な例は多摩大学である。この大学では、商品は「授業」であり、大学は授業を売るサービス業である。学生は顧客（クライアント）であり、客に尻を向けて商売するのは失礼だから、教官は黒板に字を書かずに OHP を使う。客である学生が授業をサボるのは自由であるが、サービス業である教官は勝手に休むと客に見放されるので休講は一切許されない。この一方で、多摩大学においては、学生こそが商品でもある。店が商品に責任を持つように、大学も学生の品質管理には責任を持つとされ、一年に一定以上の単位を落とした学生は、退学を勧められる。学生＝顧客論と学生＝商品論は矛盾するが、そのあたりは都合よく使い分けられているようである。こうした多摩大学のシステムは、上で述べた大学の現状に対する強い批判となっている（だがそれにしても教官もご苦労だし学生もご苦労である）。これは極端な例としても、全国の大学は教養部を廃止して、ヨーロッパ的なモデルへと転換をはかろうとしている。あるいは、逆に、東京大学教養学部のように、アメリカ的なリベラルアーツにこだわって改革をすすめるところもある……。このへん詳しくは『現代教育論』の講義を聞いてもらうことにしよう。

5. 戦場としての大学

ところで、「大学はレジャーランドである」といっても、それは決して楽園を意味しない。勉強の競争は入学試験で終わった。そしてこんどは別の競争が始まるのである。入学後は「勉強ができるかどうか勝負なのではない。異性にモテるかどうか、スポーツでカッコよくなれるかどうか、ファッションブルに着こなせるかどうか、良い車をもてるかどうか、人付き合いがうまくできるかどうか、つまり、社会と折り合えるかどうか、問題となる（『予備校はなぜおもしろい』樋口裕一、日本エディタースクール出版部）。大学というところは、たしかに勉強は楽だが、遊びやアルバイトなど、勉強以外の競争はむしろ激しくなる。大学はレジャーランドというより、むしろ競技場である。そうした（勉強以外の）競技において、東大生は必ずしも有利とはいえない。人づき合いの苦手な東大生にとって、大学はパラダイスどころではなく、ストレスのたまる戦場となるだろう。事実、筆者の調査では、抑うつ・対人恐怖・アパシーはかなり高い頻度になっている。そのうえ、駒場キャンパスでは、進学振り分けとい

う競争も加わる。

大学とは、遊べる所なのではなく、むしろ「遊びという勉強」をさせられる場所である。そのあたりをきちんと自覚したうえで、状況に流されずに生きる指針としては『大学で何を学ぶか』（浅羽通明、幻冬舎）などが役立つかもしれない。

シケプリは必ずしも悪ではない

(東京大学新聞 1997年7月15日号から引用)

駒場キャンパス前期課程二年間で、シケプリの世話に一度もならない学生はまずいない。この駒場独特の「対試験ツール」はなぜ出現したのか、そしてその背景とは。教育臨床学・青年心理学・精神病理学が専門で、駒場で「現代教育論」を開講している丹野助教授に語ってもらった。

手段としてのシケプリは善である

「僕はシケプリは必ずしも悪だとは思ってません。むしろ、きちんとまとまっているシケプリは理解の手助けになるし、こちらの言いたいことが正確に伝わるのなら歓迎します。できの良いものは僕も欲しいくらいです(笑)。」とは、丹野先生の言葉。教官としては学生に必要な知識を身につけてもらうために授業をしている。その役に立つのであれば、シケプリでも何でも全然構わないと言う。

「でも、ちゃんと授業に出ている学生は不公平に感じるでしょうね。そうならないように、教官も工夫すべきです。出席を取ったり、レポートにしたり……。」

今も昔も学生の考えることは同じで、「いかに効率良く試験に通るか」が最も関心のあるところだろう。根本的には、知識伝達を主目的とする前期課程の役割自体がシケプリを生み出している、とも言える。

「予備校の文化」がシケプリを産んだ

それに拍車をかけているのが、いわゆる「予備校の文化」だ。予備校は、大学受験という明確な目的の為に、必要な知識を、万人が覚え易いようにコンパクトにまとめる。学生は、渡されたその「パック詰め」の知識を、ただひたすら覚えればよい。

「こういった勉強のクセが、大学に入っても抜けられないんでしょうね。それに、大教室での授業は、必要な知識をいかに効率良く伝えるかが主となります。そういう状況の下では、予備校的な『情報のパック詰め』は非常に有効です。」

教える側と教えられる側、双方が効率を重視する現状に、シケプリが生まれる必然性があるようだ。

「現代は情報化社会と言われています。要点のみを的確に伝えることが求められる社会です。そういった意味では、社会を反映しているとも言えますね」

シケプリが立ち見講義を産む？

「シケプリって、マイノリティーが不利ですよ。たくさんの方が履修している授業の方が、シケプリも充実してるんじゃないんですか？」

その通りだ。履修者が少ないと、毎回自分で授業にでなければならぬ。しかし、大人数の授業だとクラスの誰かしら出席しているし、シケプリのバージョンも豊富だ。結局、みんなが出ている授業の方が楽しめ安心だ、という発想になり、講義の集中化が起こる。

「みんな大人数の講義に集まる。教室が混んでみんな出席しなくなる。ますますシケプリに依存する・・・そういった悪循環が起こっていますね。」

教える側としては、人数が多い方が伝えたいことをたくさんの人に伝えられる

し、やりがいもあるのだけど、という話もあったが。

教官は存在を周知

しかし、シケプリは本当に信用できるのだろうか。

「試験答案を採点していると、同じところを同じように間違っている答案がよくあります。間違いのパターンを三通り見つけた時などは、『ああ、シケプリが三種類出回ってるんだな』とか思ったりします（笑）。」

「出来の良いシケプリで勉強した人はいいですけど、出来の悪いシケプリが回ってきた人は可哀想ですよ（笑）。作る人は責任持って作って欲しいです（笑）。」

往々にして、シケプリにはどこかしら間違いがあるという。自分が作ったシケプリの校正を教官に頼む学生もいるという話だが、ここまで来るともう趣味の世界である。学生をシケプリ作りにここまで駆り立てるものとは一体なんのだろう。

「自分の得意な分野で腕を示したい、という知的欲求、あるいはプライドではないでしょうか？ 嫌いな分野、あるいは不得意な分野は人に任せて、自分は好きなことだけをやっていたい、という欲求もあるでしょう。いずれにせよ、ここにも効率重視の考え方が現れてますよね。」

シケプリ文化は継承されていくのか？

シケプリがあるのは東大の、しかも駒場だけである。何故他では見当たらないのか？

「一つの要因として考えられるのは、やはり進振りでしょう。進振りを受験勉強の延長と捉えると、少しでも良い点を取り、一方で他人に遅れを取らないためにシケプリを利用する、という考えには容易にたどり着くはずです。」

では、進振りが無くなればシケプリも存在意義を失うのか？

「そうとも限らないですね。シケプリが進振りのためだけのものならば、文一や文二ではシケプリは出ないはずですが。やはり、徹底的に楽を求める、学生の心理なんですかねえ。」

「でも、シケプリによって蓄積された情報が、毎年消えていくのは惜しい気がします。将来的には、講義内容をビデオ教材か何かに編集して、学生はそれを好きな時間に見れるようになるかも知れません。それこそ究極のシケプリと言えるかも知れないですね。」

おそらくシケプリ文化はこれからも形を変えて、存続していくのだろう。

大学生のいじめに対する認知

—いじめの被害加害と原因に関する調査—

丹野義彦(教養学部教育学教室)

(東京大学教養学部学生相談所報告, 2:27-31, 1995 より引用)

学生生活への適応という点から学生相談を考えるにあたって、その中心的なテーマのひとつに「いじめ」の問題がある。文部省の調べでは、いじめの発生件数は、1985年をピークに、一時減少していたが、92年頃より再び増加している。筆者に相談にやってくる学生のなかには、いじめの深い傷を持つ者がある。また、筆者は教育学の講義で、毎年、いじめの体験を報告してもらっているが、なまなましい記述が多く、いじめは大多数の学生に暗い影を落としている。そこで、われわれは、今回、いじめの実態調査をおこなったので、ここで報告しておきたい。

1. 方法

質問紙調査は、1994年5月、『現代教育論』の講義時におこなった。回答者は、男子425名、女子112名、計537名、全員が1・2年生である。すなわち、今回の調査の対象となった学生の多くは、小学校高学年時に1985年のピークを迎えていることになる。

質問紙は、小・中・高校におけるいじめの被害・加害・見聞の有無と、いじめに対する現在の態度を問うものである。前者は、森田ら(1986)を参考にして、表1に示す9種類の形態・手口をあげ、被害経験(誰かから自分がそうされたことがある)、加害経験(自分が誰かにそうしたことがある)、見聞経験(自分の身の回りで見聞きしたことがある)の有無を記入するものである。後者は、表2に示す12個の意見をあげて、4:全くそう思う、3:ややそう思う、2:あまりそう思わない、1:全くそう思わないの4点尺度で評定を求めるものである。

2. 結果

いじめ見聞についての因子分析

いじめの見聞経験の有無について因子分析をおこなった(主成分法、プロマックス回転、スクリープロットを参考に固有値1以上の2因子を抽出)。因子負荷量を表1に示す。第1因子は「心理的いじめ」、第2因子は「暴力的いじめ」の因子と解釈できる。

いじめ経験率

いじめの被害・加害・見聞の経験者の割合を表1に示す。性差があり、女子の経験率が高い形態もある。

いじめに対する態度の因子分析

12項目について、因子分析をおこなった(主成分法、プロマックス回転、スクリープロットを参考に2因子を抽出。因子間相関は0.15)。表2に示すように、第1因子は両極性の「いじめへの肯定・否定」、第2因子は「いじめの社会的原因」と解釈した。そこで、前者の8項目の評定値を合計して「肯定的意見得点」とし(第4、5、12項目は逆転して加算)、後者の4項目を加算し「社会的原因得点」とした。

いじめ経験類型と態度の関連

被害経験と加害経験の有無で以下の4群に分けた。すなわち、未経験者（被害経験も加害経験もない）、被害者（加害はなく、表1に示したいじめの9種類のうち被害が3種以上ある）、被害加害者（被害も加害も両方3種以上経験している）、加害者（被害はなく加害が3種以上ある）である。各群における各項目、肯定的意見得点および社会的要因得点の各群の平均値を表2に示した。これらの変数について、4群間で1要因分散分析と多重比較検定をおこなった。とくに肯定的意見については、加害者で最も高く、次いで被害加害者、被害加害者の順であり、被害者は最も低い。社会的要因得点については、4群で著差はない。

いじめ経験と態度の相関係数

肯定的意見得点と、被害・加害・見聞の経験の相関係数を求めると、それぞれ0.02、0.23 ($p < .001$)、 -0.03 であり、加害経験の多い者ほど肯定的意見得点が高い。また、社会的要因得点と被害・加害・見聞の経験の相関係数を求めると、それぞれ -0.09 、 0.09 、 -0.08 となり、いずれも有意ではなかった。

いじめ経験と態度の重回帰分析

肯定的意見得点を基準変数とし、被害・加害・見聞の経験を説明変数として、重回帰分析をおこなった。その結果、偏回帰係数は、被害経験が -0.91 ($p > .1$)、加害経験が 5.79 ($p < .001$)、見聞経験が -1.80 ($p < .1$)であった。つまり、いじめへの肯定的態度に有意に影響するのは加害経験であって、被害経験ではない。一方、社会的要因得点を基準変数として同じ分析をおこなったが、偏回帰係数はいずれも有意ではなかった。

3. 考察とまとめ

いじめの一般化と深刻化

表1に示すように、今回の結果は、森田ら（1986）による小学校・中学校の生徒の調査結果と大きな差がない。いじめの一般化は東大生をも例外としないわけである。

「仲間はずれ・無視」は実に61%の学生が見聞経験がある。金や物をとりあげるとか、着ているものをぬがすといった暴力的いじめの被害者もおり、いじめの深刻化・陰湿化がうかがわれる。

加害経験といじめへの肯定的態度

表2にみられるように、いじめの被害者と加害者では、いじめに対する態度は対照的である。相関分析や重回帰分析によると、加害経験がいじめへの抑止力を奪う働きをするようである。第5項目「人をいじめるのは悪いことだと思う」では群間で有意な差がない。これに対し、第6項目「人をいじめるのは面白いところがあると思う」では有意な群間差があり、加害者群と被害加害者群で評定値が高い。つまり、両群はいじめは悪いけれども面白いと考えている。森田らも指摘するように、「善悪の基準軸」は持っているが、それを「愉快さの基準軸」が相対化してしまう。いじめは、表層の現象ではなく、現代青年の価値観と関わった心の深層の病理と言えるのではなからうか。

いじめの社会的原因

いじめの社会的原因についての認知をみると（表2の第2因子）、全体では、「家庭のしつけ」が最も高く、ついで「子供自身の対人関係の変化」「テレビ雑誌のギャグ文化」の順であり、「教師の指導のあり方」は最も低かった。現代のいじめが、教師の対応だけで解決できる程度のものなら、これほど深刻化しなかつたらう。マスメディアのいじめ報道をみると、いじめを見抜けなかった学校や教師に対する一方的な非難に終始している。しかし、実はマスメディアが、「いじめは面白い」といったギャグ文化の愉快さの基準や、いじめ手口の観察学習の機会を提供している。例えば、ある種のお笑

い番組では、いじめとしか思えないゲームをコメディアンにさせ、人の身体を痛めつけることを面白おかしく演出している。このような番組を視聴した小中学生は、他人の身体を痛めつけることは、それが面白ければ社会的にも許容されるのだらうと思ってしまうだらう。マスメディアが学校教師だけを一方的に非難しても何の解決にもならないだらう。

文献 森田洋司・清永賢二（1986）いじめ．金子書房．

私の受験生時代 今時の受験生がうらやましい

丹野義彦（教養学部助教授 1973年文科Ⅲ類入学 1978年文学部卒）

（東京大学新聞 1994年9月27日号より引用）

私の受験時代は、「時間との闘い」でした。高三になってから文科系に転向したので、残り約十ヵ月をどう使うか、毎日あせっていたのです。

最初は「工学者にでもなるのかな」などと漠然と思っていたのですが、心理学をやりたくなって文転しました。当時は学生運動の実存主義的考えが残っていて、心の中について考えるのが流行だったのです。もちろん本人にとっては一大決心だったんですけどね。

始めは東北大学など地元の大学の理系に行くつもりだったのですが、文科系に行くなら、東大の方が就職のときに『潰し』がきくだろうということで、浪人覚悟で受けました。

合格発表の時、「発表は夕刻」と書いてあったのですが、実際にはもっと早く掲示されていて、暗くなってから僕が発表会場に着いたときには、辺りにはもう誰もいなかったのです。それで、親に連絡した時には、親はすでに新聞社の連絡で知っていて、「今まで何をしていたの」と逆に叱られてしまいました。青森県の高校で結構のんびりしていたせいもあるのでしょう。

その頃は『サクセス・ブック』（東京大学新聞社出版）のような情報誌がなく、東大についてはほとんど知りませんでした。当時の受験生が読んでいたのは、庄司薫の『赤頭巾ちゃん気をつけて』とか、柴田翔（前文学部長）の『されどわれらが日々』といった小説で、それが東大についてのわずかな情報源でした。共通一次が始まる前で、偏差値もなく、大学の序列が今ほどはっきりしていなくて、幸せな時代だったのかもしれない。

『東京大学物語』（週刊『ビックコミックスピリッツ』連載中・江川達也作）を読んで、今時の受験生はあんな風なのか、とうらやましく思いました。つまり、『東京大学物語』の主人公の村上君は、恋もなかなかうまくいくし、早稲田大学には受かる（東大には落ちてしまうけれど）。

つまり、これまでの古典的なエリート青年の小説とは逆なのです。そうした小説では、例えば三角関係になると、主人公は恋に失敗し、受験には成功するというのがパターンです。庄司薫の『赤頭巾ちゃん気をつけて』や柴田翔の『されどわれらが日々』もそうですし、夏目漱石の『こころ』や武者小路実篤の『友情』もそうですよね。それで僕も、恋は大学に入ってからと考えていました。

駒場には結構自由な雰囲気がありますので、勉強だけでなくその他好きなことも頑張りたいですね。

教育学は駒場生をどう見るかー強いヨコのつながり

都市コマバのいま・未来

(東京大学新聞 1994年11月15日号から引用)

駒場生の特徴については教養学部の丹野義彦助教授に話を聞いた。

現在の東大は、駒場キャンパスはクラス・サークルなどのヨコの関係が強いが、本郷キャンパスでは研究室・ゼミなどによるタテの関係が強いなど、両キャンパスの差は大きい。このことは分野に捉われずお祭騒ぎで行なう駒場祭と、少人数単位で専門的な展示・講演などを扱う五月祭との雰囲気の違いをみても明らかだと思います。僕も学生の頃、同人雑誌を作っていて駒場祭と五月祭には欠かさず出て雑誌販売をしていたので、違いは強く感じました。

もともといまの駒場祭は旧制高校の学生という身分を謳歌するバンカラ風文化を受け継いでいます。ですから、専門学部・学科の集合体で、とかく社会との接点が求められる本郷の五月祭とは、ルーツ自体性質の違うものだったといえます。

ところで、日本の大学のキャンパスは様々です。東大や慶応大のように前期と後期でキャンパスが分かれる大学もあれば、早稲田大のように、縦割りで学部ごとに別キャンパスの大学もあります。また筑波大のように全学が同じキャンパスにあるところもあります。そんななかで東大教養学部は本郷キャンパスから離れている分、伝達が不便といった難点がありますが、専門にこだわらない新しい学問を創っていける環境にあり、教官も文理間で交流できるという利点があるといえます。でもやはり全課程全学部同一キャンパスが一番の理想でしょう。

先日授業で行なった「いじめ」についての調査によれば、東大生といっても被害者経験と加害者経験との割合が殆ど変わらなかったんです。少なくとも一般に受け止められる「他人を蹴落として」という東大生のイメージには合わないでしょう。

なぜいま大学論か アメリカ型は失敗？

教養学部・助教授（教育学） 丹野義彦

（東大新聞 1993 年から引用）

1980 年代、教師の中で一番忙しいのは、非行や受験にふりまわされる中学校の教師であった。それにくらべ、大学教師といえば自由でヒマな趣味人と思われていた。しかし、90 年を境にして、大学教師は日々会議にあけくれる忙しい商売となってしまった。大学論がブームになったのもこのころからである。

今の大学論ブームには、単に、キャンパスの噂や教官の裏話といったクチコミで流れていた情報が、読者を得て出版メディアに乗ったという側面もある。しかし、ブームの底には、大学の現状に対する批判や、不透明な大学の未来に対する不安感や改革への焦りがある。そこで、ここでは、大学論を読みこなすのに役立つ予備知識や枠組みを提供することにしよう。

まず、今の大学は同時に少なくとも 3 つの変化にみまわれている。第 1 は、91 年に大学の一般教育が自由化され（大学設置基準の大綱化）、それによって全国の教養部が対応をせまられたことである。東大の教養学部のカリキュラム改革はこの流れである。第 2 は、82 年から大学予算が伸びていないため、とくに理工系学部での研究能力が下がり（例えばビーカーが買えずワンカップのびんで代用している研究室とか、事故をおこすような危険な実験室など）、研究者の大学離れや海外流出ひいては青年の理科離れがおこったことである。こうした惨状を東大の有馬元総長が社会にアピールしたり、大学院重点化したりといった動きもこの流れである。第 3 は、92 年をピークとして十八歳人口が減るので、「大学冬の時代」を心配した大学が、サバイバルのため、入試改革・教育改革・PR などの受験生獲得競争に乗りだしたことである。

こうした変化の背景には、大学の現状に対する根強い批判や不満がある。大学教師はいかにひどい教育をしているか、いかに大学がレジャーランド化しているか、大学はいかに金がなくて研究が進まない環境に置かれているかといった批判である。その際に比較の対象となるのは、多くの場合アメリカである。大学論を読んでいると、いたるところでアメリカの大学と比較し、日本の大学はアメリカを見習えという説にぶつかる。アメリカの大学を紹介した本や翻訳も多い。実際、戦後日本の大学の歴史は、アメリカナイズとその挫折の歴史であったといえる。

歴史的にみると、日本の大学はもともとヨーロッパをモデルとして作られたが、戦後の大学改革によって、アメリカの市民教育の理念にもとづいて改造された。しかし、外見だけはアメリカ型の看板をつけたものの、その理念はなかなか浸透せずに、実質的な中身はヨーロッパ型のまま残った面があった。アメリカの制度を直接取り入れた一般教育や大学院といった制度がなかなか日本に根付かなかったのはこのような事情がある。その後、進学率が上がり、大学がエリートのものから大衆のものへと変わるとつれて、何回かアメリカ型のメッキの上塗りがおこなわれた。教養部の制度化（63 年）、臨時教育審議会（84 年）などである。それでも、アメリカナイズされた制度は、大衆化の中で思わぬ方向へ変容し、しだいにメッキがはがれてきた。そのため、今回の大学設置基準の大綱化や大学院改革ということになったのである。

大学入試もその一例である。90 年から行われているセンター試験であるが、その前

には進学適性検査（1947～54）、能研テスト（1963～68）、共通一次試験（1979～89）という共通試験があった。これらは学力試験一発勝負の弊害をなくすため、アメリカ式の総合選抜（適性試験＋学力試験＋調査書）を取り入れようとした歴史であった。しかし、予備校との情報戦争に敗北したことも手伝って、こうしたアメリカナイズの試みは、日本の学歴競争社会の中で、およそ意図した理想とは逆の方へ走ってしまい、80年代には、偏差値による大学の一元的序列化と学力試験の比重増を進行させてしまったことは記憶に新しい。

大学論は複合問題である。直接には、大学入試・一般教育・専門教育・大学院教育・学術研究・教官・学生・就職などがテーマとなるが、これらの問題はその後において、企業形態・学歴社会・初等中等教育・科学技術といった多くの社会領域とかかわりをもつ。だから、社会の成り立ちの違いを無視して大学制度のみを移植することには限界がある。例えば、アメリカの企業はスペシャリストを重視し個人主義的であるのにくらべて、日本の企業は、終身雇用・企業内教育・ジョブローテーションにみられるように、集団主義的でジェネラリストを重視する傾向が強いといわれている。だから日本の企業が学生を採用する場合、スペシャリストとして大学でいかに学んだか（学習歴）ということよりも、一元的な大学序列の中でどのランクの入試を突破したか（入試歴）、どんな人脈を作ったかといったジェネラリスト的な素質を重視しがちになる。こうした社会の体質が学歴信仰や「いじめ」を生みだし、受験競争を過熱化・低年齢化させる反面、大学をレジャーランド化しサークルをはやらせる背景ともなっている。このような日本社会の体質や、日本の大学の基礎にあるヨーロッパ的特徴を分析しない限り、大学は本当には変わらないだろう。

授業評価は役に立つか

(東京大学学内広報 1993年3月31日号 淡青評論 から引用)

近ごろは、講義中、黒板に漢字を書こうとして自信がないことが多い。学期末に「この授業の改善すべき点」を学生に自由に書かせると、漢字の間違いの指摘が多い。紛争→紛争などと訂正してくれたうえに、「ワープロの使いすぎに注意しましょう」とか、「版書の誤字に気をつけてください」などと忠告してくれる。

さて、ここで取り上げたいのは、学生による授業評価である。さまざまな見解があろう。授業評価はまるで「囚人に刑務所の食事に満足しているかを聞くようなもの」という考えや、アメリカでは学生の大学への不満をそらすために行われており、学生の意見は大同小異であってあまり役に立たないという意見。研究重視という大学の体質が変わらない限り、授業評価などいくらやっても、教員の関心が教育に向かうことはない、とする考えもある。また、たしかに、上からの命で大学全体が授業評価をさせられるという事態を考えるとゾッとする。教師が学生の人気取りに走る、ちょっと難しいことを教えると評判が下がる、という声も聞こえてくる。

しかし、実際、学生に評価をさせてみると、けっこう面白い。冒頭の例のように、笑わせてくれる忠告もある。学生のほうも、予備校などで授業評価には慣れているのか、板書とかプリントとか講義の進め方など、思いもよらない役に立つ指摘をしてくれる。意外なのは、学生の要求が多様なことである。当初は「講義の内容を平易にしろ」とか、「一方通行でなく学生と議論しながら進めよ」という要求が多いのだろうと思っていたが、実際には「もっとアカデミックな内容を」とか、「授業中に当てられて意見を求められるのは敬遠したい」という要求も結構多いのである。また、授業評価それ自体に対する学生の満足度は高いようである。

学生の不満をそらすだけだ、と言われればそれまでであるが、東京大学全体が大学院重視へと動きつつある今、教員の心が学生への教育から離れるのを防ぐためにも、講義の質を高める自己努力は必要ではなからうか。

入学とメンタルヘルス

丹野義彦（教育学）

（東京大学教養学部報 1992 年 5 月号から引用）

雑誌『現代のエスプリ』が近ごろ「キャンパス・カウンセリング」特集を4回シリーズで組み、現代の学生像の明暗を描いていてためになった。「入学」という祝事も、ふつうは希望や期待など明るい面ばかりが強調されるが、別の面からみるとストレスの源泉であり、いわゆる「五月病」やアパシーの原因ともなる。このことに何か思い当たることのある人は、一度自分の心と向きあいもうひとつの面から自分を再点検してみることをおすすめする。本文ではそのための手がかりをいくつか提示してみよう。

★「荷おろし」状況

晴れて受験勉強から解放され、自由を満喫している人が多いだろう。しかし中には、かえって目標を失い、まるでエアポケットに入ったような空しさを感じ、自由な時間を持って余しぎみの人もいるかもしれない。

このような目標達成後の虚脱のことを、精神医学では「荷おろし」と呼んでいる。永年ある目標に向かって充実した生活を送ってきた人が、その目標を達成し、まわりから祝福される。しかし、中には、そうした成功によって、これから何を目標にしてよいかわからなくなり、生きがいを失って、無気力状態やうつ状態になったりするタイプの人もある。

大学合格は「荷おろし」状況の典型である。大学に入ることを最大の目標に勉強してきた人が、大学に入れば人生の目的を半ば達成したかのように感じたとしても不思議ではない。近ごろは、入試準備の低年齢化と長期間化が激しいので、このような「荷おろし」による落差も大きくなっているだろう。五月病を「合格うつ病」と呼ぶ人もいるくらいである。これに当てはまると感じる場合は、こうした状況をよく自覚し、入試の疲労を早くとるようにし、新たな目標を模索していく必要がある。

★学習スタイルとゼミナール

作家の高橋和巳は、学生時代、著者名のアルファベット順に図書館の本をすべて読む計画をたてたという。入学したての頃には、あれもこれも勉強したいというファウスト的全能感に満ちあふれ、いろいろな知的領域に手を広げる人がいる。ただし、あまり欲張りすぎて挫折し、一転して五月病になってしまっただけでは元も子もない。高橋和巳の計画も結局は挫折したようだ。

こうした挫折の原因のひとつに、大学の講義への失望があることが多い。大学教師は他の教師に比べて教え方に対する関心や熱意が低く、とくに予備校と比べると歴然とするだろう。明治時代の小説『三四郎』にも大学の講義はつまらないと書いてあるから、この状況は百年近くも変わっていないようだ。しかしこれではいかにも情けない。駒場では現在、授業の少人数化やゼミナールの重視へとカリキュラムの改善が進行中である。

大学では自分が主体としてカリキュラムを選択し、自分なりの学習スタイルを作り出す必要がある。受験勉強のスタイルから大学の学習スタイルに切りかわる継ぎ目に

五月病が発生しやすい。その学習スタイルを学ぶ最適の場が一般教育ゼミナールである。これについて、河西宏祐編『大学生が書いた現代日本社会論』（平原社）という本がある。千葉大学の教養部に所属する編者は、一・二年の学生を対象として社会調査の一般教育ゼミナールを十五年間開講してきた。この本は学生の論文をまとめたものであるが、中には正式の学会誌に採用されたものもある。教官の適切な指導があればプロ顔負けの研究も可能であることを示しており、学生のみならず教官にも一読をすすめたい本である。

★サポートネットワーク

はじめに述べたように、大学という新たな環境への適応は、知らず知らずのうちに大きな心のストレスになっていることがある。これに加えて、地方出身の人は家庭からの独立や引越しなどといった日常生活の大変化がある。不慣れなひとり暮らしからくる緊張や孤独感もばかにならない。そもそも家族や親しい友人から離れること自体がかなりのストレスである。親元を離れるということは、親から自立する解放感とともに、慣れ親しんだ子としての役割を失うという悲哀を伴う。このように、外の現実への適応と同時に、自分自身の内面への適応を見逃すべきではない。こうした危機については、小此木啓吾著『対象喪失』（中公新書）がわかりやすい。

昨今は青年の一般的傾向として、サークルや同じ高校の出身者など気の合う仲間できなく、それを越えた人間関係がなかなかできないという「小派閥志向」があり、どの小派閥にも入りそこねた人は友達ができにくいことが指摘されている。ならばこそ、この駒場においては、こうした小派閥や試験対策ネットワークなどが、困っている級友をサポートするネットワークとして育ててほしいと願うものである。私の経験から言っても、入学のため青森から上京した私は、いろいろと心細い思いもし、日常生活での緊張が大学での適応を妨げていたように思う。幸いにして、手を差し伸べてくれたクラスメートたちと友人になり、やっと大学に慣れることができたのである。

★五月病を越えて

以上、五月病を中心として入学時の心理をいくつかあげてみた。では、五月病は五月をすぎたら発生しないのだろうか？ いや決してそうではない。夏休み・秋休み・春休みなどが明けてからおこることも多い。アパシーや留年などに発展するケースもある。それらに興味のある方は、冒頭にあげた『現代のエスプリ』の特集や、笠原嘉の『青年期』（中公新書）や『退却神経症』（講談社現代新書）などの一読をおすすめする。

夏休みのノウハウ

丹野義彦

(群大広報 1989 年 7 月 11 日号より引用)

新学期もはじまったと思ったら、あっというまに夏休みにはいろいろとしている。学生諸君も、いろいろな計画をたてて、あれもしたいこれもしたいと、楽しみにしておられることと思う。「夏休みのノウハウ」というテーマで、どうしたら充実した夏休みをおくれるか、いろいろ考えてみたのだが、ここでは、わたし自身の夏休みの体験をふりかえってみることにしたい。

わたしの専門の心理学は文学部に属しているため、まわりには、文学とか哲学に興味をもつ友達が多かったこともあり、大学時代は、クラスの仲間と同人雑誌をだしていた。「鋒鋳」という名前で、ずっと年 2 回の学園祭に発行していた。というわけで、まとまった時間がとれる夏休みや学年末の休みといえば、だいたい、~~メ~~切に追われて小説を書いたり、この雑誌の編集をしたり、いろいろな調べ物をしたり、といった日々であった。充実してはいたが、かといって楽しかったかということ、まったく逆で、むしろ苦しい体験のほうが多い。旅行とかアルバイトなどもけっこうしたが、ふしぎに、そうした経験は、いまになってみると、あまり記憶から浮かんでこない。大学生というのは、はたから見ると優雅でのんきにみえるが、本人にとっては、そんなものではないようだ。将来の進路がはっきり決っていないので、何をしても、それが将来とは結びつかないし、宙ぶらりんで、自分というものの位置が決まらず、何かと苦しい時期であった。エリクソンのいう同一性拡散ということだったのだろうと、教育学部で「青年心理学」を担当しながら思ったりしている。大学時代は、二度とくりかえしたくはないような苦しい時代と思えたが、それは、わたしだけであってほしい。そうした不安定さが小説の創作に向かったひとつの動機となったが、不幸中の幸いだったのは、この時期に身につけたいろいろな知的活動の方法とか友達関係が、今の研究生活の基礎となったことである。

それにくらべれば、大学院のころは、夏休みも休日もなく、何年ものあいだ、ほとんど 1 日 24 時間をすべて研究のために使えた。研究の面で苦しいこともあったが、まとまった時間を自由に使えたので、わたしの人生の中でも、一番充実して楽しかった時期である。

そしていまの教職についたわけだが、はじめのころは、講義の準備や学内の仕事に追われて、まとまった時間を研究にさけなくて、少々欲求不満ぎみであったが、そのぶんを夏休みや学年末の休みでとりかえして、何とか帳尻をあわせていた経験がある。最近では、教育と研究もすこしは両立するようになってきたが、いまでも、夏休みは自分の専門の研究にうちこめる時期である。いずれにせよ、教官にとっても、夏休みの 1 ヶ月半は魅力であり、研究のサバイバルレースのかき入れ時である。わたし自身も、この夏はいくつか論文をしあげようと思っている。

結局、夏休みとは時間とのたたかいであって、これと思う目標をひとつ決めて、それを実行するのが、夏休みのベストな過ごし方ただという、ごく一般的な結論におちつくようだ。